

巻頭言 「涙と笑い」

宇野 元

笑うことは、心が固くなるのを防いでくれます。2017年に亡くなったスイスの神学者クルト・マーティが、こう書いています。

「みじめな状況をよりよく持ちこたえられるよう、私たちは笑うことで、いわば一息つく。けれども、それはたやすくできるわけではない。だから『われらの日用の笑いを今日も与えたまえ』と祈るべきだ。私は経験している。いちども笑わない日々がある！ 打ち明けずにいられない。まったく光の灯らない日々、神様から遠い日々がある。こういう日々を知らない人がいるだろうか？」

笑うことは、生きる力を与えてくれる。そして私たちが人間らしくあるよう助けてくれる。笑いとうめを必要としない人がいるだろうか？ なかでも、キリスト教会にはユーモアがほしい。規則や計画や会議記録が増大する教会に、と、ユーモアをこめてマーティは述べています。

ディートリヒ・ボンヘッファーが、短い生涯の最後の夏に、ベルリンの刑務所の中で記しています。「究極の真剣さは、一片のユーモアなしにはありえない」(1944年7月28日。友人エーバハルト・ベートゲ宛書簡に添えた覚書より)。これは彼にとって、机上の理屈ではなく、最も困難な時における事実でした。

イエス・キリストのユーモアは、最大の真剣さと結ばれています。

悲しくて泣いている、その人は幸いである、とイエスは語ります。しかもなんらのレトリックもなく。この上なく真剣に。大きな幸いを与える、と約束します。「悲しむ人々は、幸いである、その人たちは地を受け継ぐ」(マタイ 5, 4)。「今泣いている人々は、幸いである、あなたがたは笑うようになる」(ルカ 6 21)。この神の国のビジョンを、イエスはみずから現実のものとしてくれました。マーティが語っています。「病の癒しは、まさに、笑いを失っている人々に、もういちど笑いを取り戻してあげる奇跡にほかならなかった。」イエス・キリストは苦難と復活の勝利によって、この「奇跡」を私たちに与えておられます。涙とともに過ごす時があります。しかし、私たちは明るい存在であることができるようにされています。それにふさわしい、確かな根拠が与えられているからです。